

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：34426

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02202

研究課題名（和文）精神障害当事者の語りを生かした福祉教育のプログラムモデル開発に関する評価研究

研究課題名（英文）Evaluation for Building Program Model of Socio-Education Using the Narrative of People with Psychiatric disabilities

研究代表者

栄 セツコ（SAKAE, Setsuko）

桃山学院大学・社会学部・教授

研究者番号：40319596

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：近年、子どものメンタルヘルスの課題が顕著となり、子どもの生きる力を育む福祉教育プログラムの開発が望まれている。研究目的は「精神障害当事者の病いの語りを生かした福祉教育プログラム」のロジックモデル開発である。方法は5つの福祉教育実践団体にアウトリーチし仮説モデルを作成する。期間は2019年からの4年間である。ロジックモデルの最終的アウトカムに「障害の有無にかかわらず誰もが安心して暮らせる共生社会」を設定し、中間アウトカム（子どもの意識変容・当事者のリカバリー感覚・チームの教育力向上・ネットワーク形成）、授業実施による初期アウトカム、資源投入を図示した。今後、モデル活用の効果検証が望まれる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、「精神障害当事者の病いの語りを生かした福祉教育プログラム」のロジックモデルを試行的に開発した。本研究の学術的意義は、ロジックモデルの図示により、福祉教育が目指すアウトカムとその実現に必要な下位のアウトカムを可視化できるとともに、活動の指標が明確となり取り組みの改善に向けた分析が可能になる点にある。一方、本研究の社会的意義は、子どもの生きる力の向上の必要性を実感しながらも、学校の福祉教育担当者から具体的な教授法がわからないという調査結果（栄・清水 2020）をふまえ、汎用性の高いロジックモデルの開発は未だ福祉教育に着手されていない学校や地域における実施が期待できる点にある。

研究成果の概要（英文）：In recent years, the problem of children's mental health has become increased, and the development of socio-education programs that promote children's enjoyment of life is needed. The purpose of this study was to develop a logic model for "socio-education program that utilizes the narratives of people with mental disabilities". As a method, I conducted outreach to 5 organizations and developed a hypothetical model through discussions with members. The study period is four years, starting in 2019. The logic model make it possible to visualize the relationship between the outcome and program. The final outcome was one item related to "a symbiotic society with people with disabilities", and intermediate outcomes included three items: change in children's awareness, sense of recovery, team and network formation, initial outcomes through the implementation of the classes, and resource inputs. It is expected that the effectiveness of using logic model will be verified.

研究分野：社会福祉

キーワード：精神障害者 福祉教育 共生社会 語り ロジックモデル ヒューマンライブラリー エンパワメント

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の目的は、「精神障害当事者の病いの語りを生かした福祉教育プログラム」のロジックモデルを開発し、効果的な評価指標を提示することにある。その背景として、次の三点がある。

第1は、精神疾患の好発時期にある子どもたちの生きる力を育む福祉教育のプログラムが必要とされているものの、未だそのモデルが開発されていないことがある。近年、不安障害や摂食障害をはじめメンタルヘルスに課題をもつ子どもの増加が社会問題となっているなかで、2011年にわが国の医療計画に示す疾患である4大疾患に「精神疾患」が加わり、5大疾患の一つに位置付けられた。誰もが精神疾患になる可能性が示唆され、ようやく、2022年4月の学習指導要領の改訂において、高等学校の保健体育の『現代社会と健康』に「精神疾患の予防と回復」の項目が新設されたものの、子どもがメンタルヘルスの課題を経験しながらも、自分らしく生きる方途を見出す福祉教育プログラムはほとんどみられない。

第2は、「精神障害当事者による病いの語りを生かした福祉教育」を実践するにあたり俯瞰的なモデルがないことがある。俯瞰的なモデルとは、最終的アウトカムの設定、投入する資源、福祉教育の授業案の作成とそのフィードバックなど、一連の活動の全体図を指す。例えば、精神障害者との社会的距離の縮小やメンタルヘルスへの関心の向上を目指すには、「当事者自身による病いの語り：リカバリーの物語」を用いた介入教育の有効性が指摘されており（Corrigan, River, Lundin et al. 2001；Pinfold, Thornicroft, Toulmin et al. 2003）教材となる当事者の語りそのものにも工夫が求められる。また、子どもたちの教育的効果を回路として、語りを行った当事者のエンパワメントが期待されることから、授業そのもの構造化とその前後の活動を具体的に示した設計図が必要とされている。

第3は、筆者が「子どものメンタルヘルスを切り口とした福祉教育」をテーマとして行った研修で、アンケートに協力の得られた885名の教職員の回答のうち、「精神障害当事者の語り」を導入した経験があるとする回答は5%にすぎなかった。また、精神障害の有無にかかわらず共生社会を目指す福祉教育の必要性を感じながら、それに着手できていない理由として「具体的なプログラムや知識がない」とする回答は48.4%であった。近年、このようなプログラムの評価を行うにあたりロジックモデルが活用されている。このモデルは、社会課題解決を目指す社会的目的を達成するための社会的介入を資源投入、実施、結果、成果までの論理構造を図式化したものである（Weiss 1998）。このロジックモデルを活用して福祉教育プログラムを開発することで、適切な指標設定が可能となり、未だ福祉教育に着手されていない学校や地域においてもその実践が期待できる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、精神疾患の好発時期にある子どもたちの生きる力を育む福祉教育の必要性和、精神障害当事者の病いの語りを生かしたエンパワメントアプローチの有効性を融合したロジックモデルを開発し、そのモデルの効果的な活用に向けた方策を検討することにある。

3. 研究の方法

本研究でロジックモデルを採用した点は、体系的なプログラム評価が可能となり、効果的なマネジメントに寄与することができる点にある。研究方法は、プログラム評価に基づき、福祉教育実践と理論研究を循環的に行うため、グッドプラクティスの事例調査を段階的に行う。第1段階は事例の選定である。本研究におけるグッドプラクティスの指標として、小・中・高等学校のいずれかにおいて、共生社会の実現を目指す福祉教育の実践経験があること、年次ごとに活動

を振り返り、一定の省察をしていること、より効果的な福祉教育プログラムの作成を目指し、仮説モデルの生成・検証と修正をしていることがある。第2段階として、グッドプラクティスの指標を満たし、本研究の趣旨に賛同し協力の得られた組織・団体(事例)をアウトリーチし、福祉教育の実践者とともにワーキンググループを結成する。第3段階として、ワーキンググループで、福祉教育の実践からそのプログラムを効果的に実践する要素を抽出し、ロジックモデルの仮説モデルの生成を行う。第4段階は、生成された仮説モデルの検証・修正を繰り返し、最終年次には実践で応用可能な教育プログラムのロジックモデルを提示する。各々の組織・団体で作成されたロジックモデルから重要項目を精査し、「精神障害者の語りを生かした福祉教育プログラム」のロジックモデルを試行的に作成した。調査期間は、1年間をワンクールとして、2019年から2022年までの4年間である。

本調査は、大阪市立大学大学院倫理審査委員会の承認を得て実施している(承認番号 19-08)。

4. 研究成果

1) グッドプラクティスの事例の紹介

精神障害当事者の病いの語りを生かした福祉教育を実施するには、少なくとも、語りを行う精神障害当事者とその支援者、学校の児童・生徒と福祉教育担当教員といった複数のステイクホルダーが存在する。一方、一連の活動を列挙すると、当事者の語りの生成、学校の開拓と調整、福祉教育プログラムの作成、福祉教育の実施と評価といったプロセスがある。これらのステイクホルダーの役割と一連の活動を鳥瞰的にとらえながらマネジメントする事務局機能が必要である。以下、本研究に協力の得られた母体の異なる5つの組織・団体の事務局を示す(表1)。

表1 研究協力者の組織・団体

事務局	福祉教育の特徴
A NPO 法人	地域の施設コンフリクトを機に、福祉教育の必要性を感じ、2015年度より地域の小・中学校で実施している。目標：障害者があたりまえに暮らせる地域づくり
B 社会福祉法人	地域の施設コンフリクトを機に、福祉教育の必要性を感じ、2011年度より地域の小学校(1校)で実施している。目標：共学・共生
C 保健所	障害者自立支援法の施行を機に、2011年度より、地域の高校(1校)で実施している。目標：市民のメンタルヘルスリテラシーの向上と当事者のリカバリー
D 家族会	家族会の構成員の要望から、2011年度より、地域の高校(1か所)で実施している。目標：こころの不調を抱える子どもの権利行使
E 社会福祉協議会	メンタルヘルスに着目した福祉教育の必要性から、2015年度より、地域の小・中・高等学校等で実施している。目標：地域共生社会の実現

2) 福祉教育プログラムのロジックモデルの特徴

「精神障害当事者の病いの語りを生かした福祉教育プログラム」のロジックモデルの構成は、福祉教育の長期的な帰結によってもたらされ、最も上位にある最終的アウトカム1項目、福祉教育の方向性として期待される中間的アウトカム4項目、福祉教育の授業の目標として期待される初期アウトカム4項目、福祉教育によって実施が期待される取り組み(活動)福祉教育活動に必要と想定される投入資源(インプット)として3項目を設定した(図1)。

最終的アウトカムは、「障害の有無にかかわらず誰もが安心して暮らせる共生社会」を設定した。このアウトカムは、福祉教育の目標とする多様性を認める共生社会があり、障害の有無にかかわらず、個々の人の心の安寧が含まれる。最終的アウトカムの達成のために必要な中間的アウトカムの設定した4項目は、「子ども：人権意識の醸成・援助希求行動化・他者理解」「当事者：

リカバリーの感覚獲得・語りの活動への参加意欲の向上・社会変革の意識醸成」「チームの構成員（推進者）：多様な語りの発掘と提供・メンタルヘルスリテラシーの向上・効果的な教材の作成と普及活動」「地域ネットワーク形成：当事者の語りの場の拡大・障害者団体と行政に要望」であり、各々の項目は相互に影響を与えていた。中間的アウトカムの4項目に紐づく初期アウトカムは4項目であり、「子ども：障害者観の肯定的変容・援助希求行動の気づき・ストレスマネジメント」「当事者：障害者観の肯定的変容・自己効力感の向上・語りの社会的意義の認識」「チーム：福祉教育の効果の実感・福祉教育実施の達成感・チームの一体感の向上」「地域ネットワークづくり：多機関協働の効果・ネットワーク形成・学校開拓」を設定した。【精神障害当事者の語りを生かした福祉教育の実施】という活動には、「事務局」「チーム会議」「当事者」の項目を設定した。それらに必要なインプットは3項目であり、人材（当事者・事務局機能担当者・関係機関など）、資金（教材づくり・会議費など）、モノ（プログラムに必要な材料）を設定した。



図1 精神障害当事者の語りを生かした福祉教育プログラムの体系図

3) 精神障害当事者の語りを生かした福祉教育プログラムの効果的な要素

精神障害当事者の病いの語りを生かした福祉教育プログラムの効果的な要素は、以下の4点である(表2)。【A. 福祉教育プログラムを推進する組織】は、福祉教育を進めていくチームに関する項目である。まず、チームの構成員として、語りを行う精神障害当事者や子どもたちの発達段階に応じた授業案を作成する教育委員会や養護教諭の参画も重要な点である。また、全体活動の進捗状況を俯瞰的に捉えながらマネジメントしていく事務局の機能は不可欠である。実際の活動に着手するには、活動の資金や会議を開催する場なども必要となる。【B. 教育機関における福祉教育の実施】は教材づくりに関する項目である。子どもの発達に応じた授業案の作成に際して、小・中学生では45分、高校生では50分の時間枠内で設定する。また、当事者の語りも子どもの発達段階に応じた文言や表現方法を考慮する必要がある。また、子どもからの語りの評価は当事者のエンパワメントにつながる事が考えられ、語りに対するアンケート項目の作成も重要な項目となる。【C. 福祉教育プログラムに対する広報・啓発活動】は福祉教育プログラム

を普及するためのツール、普及の機会などの項目がある。そして、【D. ネットワークの構築を目指した活動】は福祉教育プログラムを実施する組織・機関のストレンクスが活かされ、地域共生社会づくりの網の目づくりに寄与する項目である。当事者の語りにより、子どもたちの援助希求行動の向上が考えられ、地域におけるメンタルヘルスの支援機関や医療機関とのネットワークをつくるのが共生社会の実現の一步となる点で重要な項目と言える。

表2 精神障害当事者の病いの語りを生かした福祉教育プログラムの効果的な要素

A. 福祉教育プログラムを推進する組織
チームの有無 チームの構成員の属性 チームの活動目標の明確さ マネジメントできる構成員（事務局機能）の有無 チームの構成員による会議の有無 活動に必要な資金の有無
B. 教育機関における福祉教育の実施
福祉教育内容のパッケージ化の程度 子どもの発達段階に応じた福祉教育内容の有無 福祉教育内容に対する子どもからの評価項目の有無
C. 福祉教育プログラムに対する広報・啓発活動
組織・団体の福祉教育プログラムを紹介するパンフレットの有無 パンフレットを配布・紹介できる機会の有無 組織・団体の福祉教育プログラムを地域に広報できる機会の有無
D. ネットワークの構築を目指した活動
福祉教育プログラムを実施する組織・団体の相互機能の理解の程度 メンタルヘルスの課題を抱えた個人に対応できる程度 福祉教育プログラムを行政の計画に反映できる程度 福祉教育プログラムについて、同様の活動をしている組織・団体と情報共有できる機会の有無 福祉教育プログラムについて、学会等で発表したり、専門家により意見をもらえる機会の有無

以上のように、「精神障害当事者の語りによる福祉教育プログラム」のロジックモデルを提示し、そのプログラムが有効的に機能する要素を抽出した。これによって、同様のタイトルで福祉教育を目指す際の手順や指標になることができる。今後、ロジックモデルの活用による効果検証と、より有効なツールや子どもの発達段階に応じた福祉教育プログラムの開発が期待される。

また、本研究が学校における福祉教育をフィールドにしたため、精神障害当事者の語りの形式が講義形式で一方的な語りになる傾向があった。この課題については、語り手と聞き手の対話を重視したヒューマンライブラリー形式を採用する試みを提案できる。

文献

Corrigan, PW., River, LP., Lundin, RK., et al., (2001) Three strategies for changing attributions about severe mental illness. *Schizophrenia Bulletin*, 27(2), 187-195.

Pinfold, V., Thornicroft, G., Toulmin, H., et al., (2003) Reducing psychiatric stigma and discrimination: Evaluation of educational interventions in UK secondary schools. *The British journal of psychiatry*, 182(4), 342-6.

栄セツコ・清水由香(2020)「精神障害者の語りを生かした精神保健福祉教育の促進に関する一考察～精神保健福祉教育に関する教職員の意識調査～」『日本地域福祉学会第34回大会』武庫川女子大学。

Weiss, CH.著 佐々木亮監修(1998=2014)『入門評価学 政策・プログラム研究の方法』日本評論社。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 栄セツコ	4. 巻 53(3)
2. 論文標題 アンチスティグマと学校メンタルヘルスリテラシー教育	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 精神保健福祉	6. 最初と最後の頁 229-232
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 栄セツコ	4. 巻 48(2)
2. 論文標題 ヒューマンライブラリーにおける偏見低減に効果的な実践要素－精神障害当事者の語りに基づく講義形式の比較を通して－	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 桃山学院大学総合研究所紀要	6. 最初と最後の頁 47-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 栄セツコ	4. 巻 26(2)
2. 論文標題 ピアサポートを支える理論と原理 当事者の「経験」に着目して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 精神障害とリハビリテーション	6. 最初と最後の頁 134-138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 栄セツコ	4. 巻 47(2)
2. 論文標題 精神障害当事者の病いの語りが中学生の意識変容にもたらす影響－自由回答データのテキストマイニング分析から－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 桃山学院大学総合研究所紀要	6. 最初と最後の頁 91-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 栄セツコ	4. 巻 39(4)
2. 論文標題 ピアサポートの専門性の向上を目指す人材育成－当事者と専門職によるコ・プロダクションの中で－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 精神科	6. 最初と最後の頁 473-479
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 栄セツコ・船越明子	4. 巻 47(4)
2. 論文標題 こころの病いの語りによる自己変容のプロセス－障害当事者による自分が主人公の物語の生成－	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ソーシャルワーク研究	6. 最初と最後の頁 50-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 栄セツコ・船越明子・柳 尚孝・北村和孝・蒲原綾子・角谷久美子・彼谷哲志・ゆり	4. 巻 24(2)
2. 論文標題 新型コロナウイルス感染症の拡大がピアスタッフ・ピアサポーターの生活様式やピアサポート活動に与えた影響	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 精神障害とリハビリテーション	6. 最初と最後の頁 171-178
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 栄セツコ	4. 巻 61(4)
2. 論文標題 自助と自治支援の視点から 病いの語りがもつ力の効用に着目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 精神医学	6. 最初と最後の頁 423-433
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 栄セツコ・松永貴久美	4. 巻 35(5)
2. 論文標題 精神障害当事者と家族が望む精神保健福祉教育 こころの不調を学ぶ教材「はーとトンネル」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 精神科	6. 最初と最後の頁 492-498
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計19件 (うち招待講演 7件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 村上貴栄・栄セツコ
2. 発表標題 MeRMoの活動を通じたメンタルヘルスリテラシー教育 第2報
3. 学会等名 日本精神保健福祉士協会第58回全国大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 栄セツコ・清水由香 他
2. 発表標題 ヒューマンライブラリーにおける偏見低減に効果的な実践要素に関する一考察
3. 学会等名 日本精神障害者リハビリテーション学会第30回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 栄セツコ
2. 発表標題 ケアと地域づくりとしてのヒューマンライブラリー
3. 学会等名 一般社団法人 コミュニティメンタルヘルスアプトルーチ協会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 栄セツコ
2. 発表標題 私の人生の主人公は私～語りが教えてくれたこと～
3. 学会等名 リカバリーの学校@くにたち（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 栄セツコ・清水由香
2. 発表標題 ヒューマンライブラリーにおける偏見低減に効果的な要素
3. 学会等名 日本精神障害者リハビリテーション学会第29回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 坂本明子・栄セツコ
2. 発表標題 リカバリーカレッジを共に創造する
3. 学会等名 日本精神障害者リハビリテーション学会第29回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 本間貴宜・中山ちはる・栄セツコ
2. 発表標題 障害福祉サービスにおける精神障害当事者の「病いの語り」を育む支援関係についての取り組み
3. 学会等名 日本精神障害者リハビリテーション学会第29回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 村上貴栄・栄セツコ
2. 発表標題 中学生への「心の病の授業」の実践からの一考察
3. 学会等名 日本精神保健福祉士協会第57回全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 栄セツコ
2. 発表標題 つながりー仲間って何だろう？
3. 学会等名 岐阜県精神障害者リカバリーフォーラム（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 栄セツコ
2. 発表標題 精神障害当事者の語りを生かしたヒューマンライブラリーに関する一考察
3. 学会等名 日本ソーシャルワーク学会第38回全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 本間貴宜・中山ちはる・栄セツコ
2. 発表標題 ヒューマンライブラリーの手法を援用した精神障害当事者の「病いの語り」を育む交流会の取り組み～寝台列車 峠 編
3. 学会等名 日本精神障害者リハビリテーション学会第28回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 栄セツコ・清水由香
2. 発表標題 精神障害当事者の語りを生かしたヒューマンライブラリーの有用性ー「本」の役割を担った当事者の振り返りとともにー
3. 学会等名 日本精神障害者リハビリテーション学会第28回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 清水由香・栄セツコ
2. 発表標題 精神障害当事者の語りにヒューマンライブラリーの要素を加えた福祉教育プログラムのロジックモデル構築の試み
3. 学会等名 日本精神障害者リハビリテーション学会第28回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 栄セツコ・清水由香
2. 発表標題 精神障害者の語りを生かした精神保健福祉教育の促進に関する一考察
3. 学会等名 日本地域福祉学会第34回全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 栄セツコ
2. 発表標題 新型コロナウイルス感染症によるパンデミックがピアサポーターの生活様式や活動に与えた影響
3. 学会等名 日本社会精神医学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 栄セツコ・清水由香
2. 発表標題 当事者の語りを生かした福祉教育プログラムに関する一考察～ヒューマンライブラリーの応用可能性をもとに～
3. 学会等名 日本精神障害者リハビリテーション学会第27回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 栄セツコ
2. 発表標題 学校における精神保健福祉教育
3. 学会等名 富山国際大学（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 栄セツコ
2. 発表標題 演劇でリカバリー イタリアの精神保健から学ぶ
3. 学会等名 全国精神障害者地域生活支援協議会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 栄セツコ
2. 発表標題 精神障害者の語り部活動
3. 学会等名 京都文教大学地域志向教育研究ともいき研究助成事業 ヒューマンライブラリー事始め研修（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

報告書 ・栄セツコ監修（2019）『精神障害当事者の語りを生かした福祉教育プログラムモデル開発に関する評価研究2019年度研究成果報告書』（100ページ）. ・栄セツコ監修（2020）『精神障害当事者の語りを生かした福祉教育プログラムモデル開発に関する評価研究2020年度研究成果報告書』（132ページ）. ・栄セツコ監修（2021）『精神障害当事者の語りを生かした福祉教育プログラムモデル開発に関する評価研究2021年度研究成果報告書』（61ページ）. ・栄セツコ監修（2022）『精神障害当事者の語りを生かした福祉教育プログラムモデル開発に関する評価研究2022年度研究成果報告書』（82ページ）. ヘルスケア関連団体のネットワークを支援する情報誌 ・栄セツコ（2019）「『病いの語り』と『ピアサポート』を通して、精神障がいをもつ人たちが自分らしくいけることができる社会をつくる研究に取り組む」『まねきねこ』第53号、7-8. 冊子 ・栄セツコ・一般社団法人しん（2021）『私の物語 あなたの物語 ヒューマンライブラリー 病いの語りから学ぶ 寝台列車峠 編』（27ページ） ・栄セツコ・一般社団法人しん（2022）『私の物語 あなたの物語 ヒューマンライブラリー 病いの語りから学ぶ 寝台列車峠 途中下車編』（41ページ） ・栄セツコ・一般社団法人しん（2023）『私の物語 あなたの物語 ヒューマンライブラリー 病いの語りから学ぶ 寝台列車峠 終着駅編』（51ページ）

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 P.Solomon氏「近畿ピアスタッフの集い「海外のピアサポートを知ろう！」	開催年 2023年～2023年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
米国	ペンシルバニア大学		